

発表題目：「ひとり」生きる：沖縄のシングルマザーの親族ネットワークに着目して

所属：立命館大学大学院（学振 DC2）

氏名： 平安名萌恵

1200 字程度で発表内容を記載してください。

沖縄県は、離婚・非婚シングルマザーの出現率が、日本国内において特に高い値を示している。その理由は、沖縄では女性がひとりで子どもを産み育てる場合、血縁の親族ネットワークからサポートを得ることができるからとされている。しかし、その実態については十分に明らかにされていない。そこで、本報告では沖縄のシングルマザーの子産み子育てにおける親族との関係性を検討する。

戦後以降、都市社会学者たちは、沖縄県内の都市部において相互扶助的な地縁・血縁ネットワークの存在を明らかにし、「沖縄的共同体は資源が乏しい沖縄の人々が生き抜くための生活基盤」であるとみなした。そして、沖縄のゲゼルシャフト的な共同体は、戦後産業化が生じなかった沖縄における過剰都市化現象を生じさせたとも言われている（以下、沖縄的共同体論と称する）。沖縄的共同体論は、都市病理学者・家族病理学者にも肯定的に共有され、近代社会の「病理」の象徴とされた母子世帯のシングルマザーでさえ、沖縄の場合、相互扶助的な親族に支えられながら「自由」に「奔放」に子産み・子育てしているとみなされた。その後、沖縄の共同体論は他の沖縄研究において広く共有され、現在に至るまで、沖縄のシングルマザーの子産み子育ては「問題」化されることなく、詳細な生活実態の把握は十分に行われなかった。

ただし近年、社会学者・岸政彦を中心に沖縄の人々を対象とした生活史調査が行われ、沖縄の共同体におけるジェンダー差別や排除が指摘されるようになった。そのため、シングルマザーと彼女たちを支えているとされる親族との関係性を再考する必要がある。本報告では、沖縄のシングルマザーがどのように親族を捉え関係性を構築しているのか、子産み子育てをめぐる選択の語りから検討する。

報告者は、2018 年以降から沖縄県那覇都市圏で、現在シングルマザーとして子産み子育てをしている女性 25 人を対象に生活史の聞き取り調査を実施している。調査の結果から、相互扶助的とされた親族関係のなかにもジェンダー格差が存在し、彼女たちは十分にケアを受けることなくひとりで子産み子育てをしていることが明らかになっている。さらに調査からは、パートナーからの暴力から逃れるために同居などの形で親族とのかかわりを維持しているものの、親族からのケアを受けていないケース、あるいは受けている以上のケアを親族に与えている調査対象者の存在も確認された。そうしたケースにおいても、進学、就労、出産、育児の場面において自らの判断だけで行われていた。すなわち、誰にも頼りにすることができない彼女たちは、自らを頼りに行為選択を行っていることが明らかになった。さらに、現在調査中の高齢の寡婦 12 人の生活史から、そうした選択のあり方が、世代を超えて確認されつつある。

しかし、本報告では、親族ネットワークのなかで「ひとり」生きる沖縄のシングルマザーの生き方が、日本の近代化と併存する個人主義とイコールとしてみすことはできない可能性を示す。そうした生き方は、戦後日本本土とは異なる近代化を経験した沖縄における、「沖縄的なもの」としての構築プロセスとして考察する必要性を提示する。